

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：10104

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13681

研究課題名（和文）診察場面における家族規範の比較分析

研究課題名（英文）Comparative Analysis of Family Norms in Medical Examination Situations

研究代表者

須永 将史（Sunaga, Masafumi）

小樽医科大学・商学部・准教授

研究者番号：90783457

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間中は、コロナ禍もあり、当初の計画通りに研究を進められたとは言えなかった。研究計画の段階で対象を予定していたのは医療機関であり、医療診察場面でのコミュニケーションが分析の主題だった。新規の調査は難しかったので、これまで取ったデータをもとに分析論文を執筆することに注力した。また入手可能なデータを分析しながらコミュニケーションの本質そのものの構造を考察するという基礎的研究を深めた。結果的に、コミュニケーションの身体性に対する分析の手がかりをえることができた。とりわけ「移動」と「ジェスチャー」「対象の認知」の関連性に焦点化した研究論文を多く執筆できたことが重要な成果といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オンラインコミュニケーションについての研究成果は、今後ますます増えるDX（デジタルトランスフォーメーション）の際に生じるコミュニケーショントラブル解消に向けて、重要な視座を提示できたといえる。また、「移動」と「ジェスチャー」「対象の認知」に関する研究は、移動学習などの研修場面での教育効果の保障に対する貢献が見込めるため、今後ますます研究が積み重ねられるべきだと考えられる。とくに本研究では、会話分析という実証的な方法を用いたため、今後同じ方法で異なる対象にアプローチすることで、知見同士の比較も可能となる。

研究成果の概要（英文）：During the study period, the study could not be said to have proceeded as originally planned due to the Corona disaster. At the time of the research plan, the target of the study was a medical institution, and communication during medical examinations was the subject of the analysis. Since it was difficult to conduct a new survey, we focused on writing an analytical paper based on the data we had obtained so far. While analyzing the available data, we also deepened our basic research by considering the structure of the essence of communication itself. As a result, we were able to obtain clues for analyzing the physicality of communication. In particular, we were able to write many research papers focusing on the relationship between "mobility," "gesture," and "object recognition," which is an important achievement.

研究分野：社会学

キーワード：会話分析 ジェンダー 家族 ケア 医療

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、高齢化の進む現代の日本社会では、厚生労働省主導のもと、大病院に患者が集中するこれまでの医療制度から、地域に根ざした医療機関を充実させる枠組みへの転換が進行していた。同時に、一次医療における患者中心の意思決定支援のための制度作りが進行していた。そのため日本の医療制度のなかでも申請者は、下記の2つの取り組みに注目していた。

第1に、総合診療を行なう「家庭医療専門医」(以下家庭医)である。家庭医は、臓器別医療者という意味でのいわゆる専門医とは異なり、総合的かつ継続的に診療を行なうため、診断におけるコミュニケーションが重要であると言われている。とくに、医療だけでなく「ケア」という側面もまた重要で、相互行為における性別規範の影響やコミュニケーションそのものの技法の分析の必要性に、医療ケアの実践家もまた注目していたのである。

これに対し申請者は、研究開始時まで、家庭医の診察場面をビデオ撮影し、その相互行為の構造を研究することで、患者が診察のなかで家族の心配事を語りだす際、タイミングを見計らい、医師に聞いてもらえるようにさまざまな方法を使用していることを明らかにしてきた[課題番号16H07260]。家庭医の診察場面の研究は、家族がどうあるべきか、家族とどう生活すべきかが語られる現場をダイレクトに扱うことで精妙で微細な秩序を明らかにしてきたのである。

第2に、東日本大震災以降、災害と医療・ケアの関係にますます注目が集まっていた。申請者は震災以降、さまざまな社会的活動に参加して、災害後のケア場面を研究し、災害の現場で活動する行政や社会福祉協議会の実践を記録してきた。とくに、福島県の避難所および仮設住宅でおこなわれたボランティア活動(おもに「足湯」と呼ばれる活動)の相互行為をビデオに収め、会話をしながらマッサージするという複合活動のなかで、ボランティアが手もみのタイミングを調節し、避難者の語りへの傾聴を巧妙に達成する技法を明らかにした。災害は患者の精神にも多大な影響を及ぼしており、診察のコミュニケーション技法がいかなる効果をもたらすのか、実証的に明らかにしてきた。

こうした背景のもと申請者は、2016年から、岩手県の被災地区の病院で糖尿病の診察場面をビデオ収録してきた。現場の医師によれば、震災前に比べ、震災後は糖尿病性腎症が悪化してきた患者が増えている。糖尿病の診察場面はまさに、家庭での生活習慣が指導される現場と言える。診察のなかで、患者への助言を通じて、患者の生活を改善するようさまざまな相互行為的技法が発揮される場面である。

上の「家庭医の診察場面」「被災地での糖尿病の診察場面」に共通するのは、地域と家庭で過ごし生活を支えるために、「家族とどのようにかわるか」という規範が作動しているという点である。申請者は家族社会学あるいはジェンダー論の観点からこの規範を相互行為のなかで明らかにすべきであることを研究してきた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、医療診察場面における家族規範の反映を解明することにあつた「家庭医の診察場面」および「被災地での糖尿病の診察場面」における相互行為を経験的に

分析し比較することで、性別規範・家族規範はどう現れているのか、それを参加者は相互行為のなかでどう受け止めどう処理するのか、を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

申請者が拠って立つ分析方法は「会話分析」である。会話分析は、基本的に、自然になされる相互行為をビデオに撮り、それを分析し、相互行為の組織に係わる諸側面を明らかにしようとするものである。とくに、相互行為の前後関係上の様々な組織を解明するため、いわゆる「成員カテゴリー化装置」の解明を中心におこなう。会話分析の手法を用いることで、診察場面で参加者が自他をどのように分類し、どのように特徴づけるのか、そしてその特徴づけのなかにどのような規範が見いだせるのかを明らかにすることができる。

### 4. 研究成果

#### 【2020 年度】

2020 年度は、これまでの学会発表などでのフィードバックを踏まえ、収集したデータを聖地に分析し、論文執筆を試みた(2 件)。また、新しい分析の視点を加え新規で学会発表をおこなった。

(1) 医療マッサージの相互行為を分析し、相互行為のなかで痛みがどのように取り扱われるのかを分析した。施術者は相手に痛みを尋ねる際に質問のための発言を組み立てる。そのとき、YES/NO の疑問文を使うことが多いが、その極性はどのように相互行為的環境のなかで選ばれているのか、そのプロセスを分析した。

(2) 家庭医の診察場面の冒頭で、「ちょっと先生さきに相談あるんだけど」と患者が切り出す場面を会話分析によって解明した。このように切り出すことで、患者は、「診察」という全体的構造をもった活動の中で、自身の相談をどのように位置づけているのか、そして医師はその相談をどのように取り扱うのか、分析した。

(3) また学会発表では、子育てについて話し合うワークショップの中で、「こども」をどのように語るのか、そこに参加者の家族規範はどのように見いだせるのか、分析した。

#### 【2021 年度】

2021 年度は、2020 年度に出版した診察場面の相互行為研究についての論文を踏まえ、家族規範の分析をより精緻に進めることを目標とした。同時にコロナ感染拡大によって増加したオンラインコミュニケーションによって、人々のコミュニケーションの構造がどのように変化したかという基礎的な研究も進めた。

(1) 「家族への配慮と家事労働 感情管理と道徳を教えること」という研究論文では、家族成員内の感情管理がどのように獲得され、教えられるのかを分析した。会話分析の手法を用いて、両親が子どもを叱ったりなだめたりする際にどのように子どもに道徳や倫理を伝えながらそれをおこなうのかを具体的な発話・行動をもとにあきらかにした。この知見については、ジェンダー論の理論的研究および追加のデータをもとに、さらに分析を精緻化していく予定である。

(2) 「オンライン視察はどのように「物足りない」のか 本拠としての現地視察」で

は、オンライン研修の中で「実際に会って研修すること」がどのように理想化され、物足りなさを埋めるレトリックとして機能しているのかをあきらかにした。そしてそこから人々が相互行為やそれにまつわる規範をどのように考えているのかを分析し、学会報告を行なった。

#### 【2022 年度】

2022 年度は、2 つの研究成果が得られた。本研究プロジェクトは診察場面の規範の解明だが、2021 年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、人々のコミュニケーションの構造は変化したかという基礎的な研究を進めた。

(1)「見る」という活動に焦点を絞り、「他者の見ているものを見ること」あるいは「自身の見ているものを他者に見えるようにすること」がどのように行われているのかをあきらかにした。会話分析の手法を用いて、どのような体系的ふるまいによってローカルな見ることの達成がなされているのかを分析し論文化した。

(2)新型コロナウイルス感染症の影響下で変化した、コミュニケーションの構造の詳細を明らかにした。使用したデータは、オンラインで行われる研修場面である。本プロジェクトのテーマである「診察場面」と、この「研修場面」とは、「発言順番が厳格に管理される」という共通点がある。医療の診察場面では、医師が全体の進行を管理するのに対し、研修場面では司会が発言順番を管理するのだ。そしてどちらも、自由に発言順番を取得してよい日常会話とは異なっている。ではこの場合、医療場面と研修場面ではそれぞれどのように発言順番の取得の仕方が管理されるのか。この点の比較のために本研究が実施された。

研修場面の発言順番の管理の仕方を明らかにするため、新型コロナが与えた影響と変化に照準した。具体的には、これまで対面でなされていた活動がオンラインのビデオ通話によってなされることになったときに、発言順番をどのように取得するようになったのか、身体的ふるまいはどのように呈示するようになったのかを扱った。この変化を、本研究プロジェクトの中心的手法である会話分析の手法を用いて明らかにし論文化した。

#### 【2023 年度】

2023 年度は、2 つの研究業績を完成させた。

(1)第1に、移動中の相互行為構造のなかで家族規範がどのように現れてくるのかに焦点を当て研究を進めた。東日本大震災の被災地にて、子どもに地域学習させる取り組みを調査した。そのなかでも、その取組を実現させるための「下見」において、放射線を測量しながら現地を調査する場面を分析した。その場面に先立って、参加者は計画をたて、下見をしながら現地調査をおこない、実際の場面をシミュレートする。とくに、下見中、突然放射線の線量計が鳴るケースがあった。その場合、参加者は、まわりの環境を観察しながら、なぜ線量が上昇したのかを推論する。環境に対する認知の変化がどのように相互行為の中で起こるのかを分析し、書籍の一部として出版した。

(2)第2に、研究期間中にコロナ禍が発生し、研究遂行の必要上、共同で研究を行った。コロナ禍において、人々の相互行為構造に変化が生じ、対面的相互行為に替わって代表的な手段となったのがオンラインコミュニケーションである。須永と共同研究者の菊地洸平、七田麻美子は、東日本大震災の被災地にて再生可能エネルギー事業に取り組む企

業とともに、オンライン企業研修のデータを集め分析した。研修中、しばしば研修内容に対する不満の兆候、あるいは不信感が研修参加者から示されることがある。そのような問題の処理を、オンラインコミュニケーションのなかでどのように勧めていくのかを分析し、その知見は『認知科学』に雑誌論文として掲載された。

研究期間全体では、診察場面における医師患者の相互行為において、悩みをどのように吐露するのかを分析した論文、質問のデザインの中に他者の痛みに対するどのような理解が現れているのかを分析した論文など、順調に業績を公開する事ができた。コロナ禍で新規の調査件数が著しく減ってしまったが、他方で、既存のデータの分析を深め、執筆に専念することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊地 浩平, 七田 麻美子, 須永 将史	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 オンライン活動で立ち現れる「物足りなさ」と「本拠としての現地」: 企業研修におけるDX事例の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 243-255
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11225/cs.2022.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Korenaga, R., Mori, I., Sunaga, M., Ikegami, S., & Endo, T.	4. 巻 5(2)
2. 論文標題 Embodied practice in a tidying up activity Responsibility of family members for their objects	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Research on Children and Social Interaction	6. 最初と最後の頁 151-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1558/rcsi.12420	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永 将史	4. 巻 23
2. 論文標題 質問のデザインにおける痛みの理解可能性 在宅マッサージの相互行為分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 194 ~ 209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.23.1_194	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永 将史	4. 巻 31
2. 論文標題 診察の開始位置での問題呈示はどう扱われるか : 「ちょっと先生さきに相談あるんだけど」の受け止め	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 57 ~ 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 菊地 浩平, 須永 将史, 七田 麻美子
2. 発表標題 オンラインでの質疑応答における反応の不在と自己言及: なぜ人は「お答えになってますでしょうか」と言うのか
3. 学会等名 2023年度日本認知科学会第40回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 七田麻美子, 菊地浩平, 須永将史
2. 発表標題 オンライン視察はどのように「物足りない」のかー本拠としての現地視察
3. 学会等名 日本認知科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 須永将史
2. 発表標題 女子依存症回復支援プログラムの相互行為分析 「女子依存症回復支援モデル事業」のフィールドワーク (3)
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 須永将史
2. 発表標題 「子ども」はどのように議論されるのか 話し合いの会話分析
3. 学会等名 第6回議論学国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小宮友根・黒嶋智美編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ (須永将史, 担当範囲 第5章「計画はいかにして修正されるのか 放射線量の可視化と空間の構造化」 pp95-pp113)	

1. 著者名 須永将史 (伝康晴・前川喜久雄・坂井田瑠衣監修 牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 外界と対峙する (シリーズ 言語・コミュニケーション研究の地平) (担当範囲: 第4章「巣穴が見えるまで 概念の獲得とカメラフレームの利用可能性」 pp74-pp100)	

1. 著者名 是永 論、富田 晃夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 172
3. 書名 エスノメソドロジー 住まいの中の小さな社会秩序 家庭における活動と学び (第三章「家族への配慮と家事労働 感情管理と道徳を教えること」 pp90 - pp104, 須永将史)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------